
ラベンダー・ガーデン

小林 健一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラベンダー・ガーデン

【Nコード】

N2777Q

【作者名】

小林 健一

【あらすじ】

死んだ恋人の影をおって、思い出の場所にやってきた由美子の、終わりと始まりの物語です。ラベンダーの咲く高原を思いつつ書きました。

肌寒い高原の風は、夏なのにすでに秋の気配を感じさせた。去年来たときと、おんなじね——私は思う。この風も、ラベンダーの花も、あの湖も、何一つ変わってはいない。唯一つ違っているのは、信彦さん、あなたがいないことだけ。

信彦さん——そう、囁いてみる。なぜ、もう会えないの？

分かっている。あなたは、今年の春、交通事故で死んでしまった。それは、もう、どうにも仕様のないこと。——でも、だからこそ、諦めきれないの。好きなのに、もう会えないなんて。どうして？ あなただって、私のこと、まだ好きなんでしょう——。

私は、視線を、はるか先の湖に移す。湖までは緩い下り坂になっていて、一面にラベンダーが咲き乱れていた。その薄紫の絨毯は、遥か湖の青と相俟あいまつて、とても美しく輝いて見えた。

あそこへ行ってみようかしら、ふと、そう思う。別に、あてのある旅ではない。帰れなくなつて構わない。私は、湖の方に向かって、一歩踏み出した。

湖までは、二十分位かかった。人影もまばらな山の中。美しいラベンダーをかき分けるように進む。「穴場なんだよ」——あなたが教えてくれた通りね。

湖畔には、乗り捨てられた古いボートが何隻もある。去年、あなたと冒険して、あのボートに乗ったつけ。

一人、ボートで、沖に漕ぎ出す。去年は、あなたが漕いでくれたんだと思うと、握りしめたオールにも、あなたの手の温もりを感じる。

空は、広い。特に、こうやって湖のまん中から見ると。雲一つない青空は、吸い込まれてしまいそうなほどに。

「怖い……」

「何が？」

「なんだか、空に吸い込まれてしまいそうなの」

「大丈夫、僕が守っているから——」

あなたはそういつて、私をそうつと抱き寄せてくれた。そして、初めての、口づけ——。ああ、いけない。ここにいたら私、あなたの面影から一生逃れられない気がする。

でも。——それならそれでいいわ。私、あなたとともに生き、死んでゆくから……。

ボートで対岸までゆくと、そこはもう誰もいない野原。ラベンダーと高原の木々の間に、道なき道が見える。

私は、初めて見るその道を、歩いてゆくことにした。もう、帰れなくなつて構わない。私の人生は、あの日で終わってしまったの。あなたがいなくなつた、あの日で。

もう、迷わない。ポケットには、睡眠薬もある。このまま人知れぬ山の中で、静かに眠るように死んでゆく。そして、あなたの元へ行くの。

私が、死に場所を求めて歩いていると、ふと向こうに人影が見えたような気がした。

「誰？」

怯えながらも声に出す。でも、返事はない。

目の錯覚だつたのかしら。そう思つたときだつた。

「由美子」

えっ？ 私の名前を呼ぶその声は——「信彦さん？」

「やっぱり由美子だつたんだ。久しぶりだなあ」

「信彦さん、あなた、どうして此処へ？」

「ここは、君との想い出の場所だから、懐かしくてね」

私は眼を凝らした。そこには信彦さんの姿はない。でも、あの暖かな彼の雰囲気があることだけは感じられた。彼は、そこにいるのだ。

「逢いたかった——」

「僕だって同じさ。いつだって君のことを想っていた」

「どうして今まで話しかけてくれなかったの？」

「今は、特別な時なんだ。誰もいないこの想い出の場所で、二人の想いが共鳴している。その力で、ようやく話すことが出来ているんだ。もう何分かしたら、またお別れなんだよ」

そんな……！

「いやよ！ 私、あなたの処へ行く」

「由美子——」 信彦さんの雰囲気、ふっと動いた気がした。

「君はまだ生きねばならない。僕の処に来ることは出来ない。——
それでいいんだ」

「私、ここで死ぬ」

ポケットから、睡眠薬の袋を取り出す。私、これを飲んで、ここで静かに死んでいくの。一人じゃないんだから、怖くないわ。

「由美子、君は一人じゃない。分かるだろう」

「そうよ、私には信彦さんがいるもの」

「そうじゃない。君には両親や、友達や、他にも大切な人たちがいるだろう。君が死んだらみんなが悲しむ」

脳裏に、私の死を知って悲しむ両親の姿が浮かんだ。急に、気持ちが悪くなっていく。

「でも、私はあなたの処に行きたい。死んであなたの処に……」

「由美子。君の命は君だけの物ではないんだ」

「だけど——それなら私の人生って何なの？ 望まない生を、ただ碌々と生きて行かなくてはならないの？」

悲しそうな信彦さんの雰囲気を感ずる。

でも——だってそうでしょう？ 私の人生は私の物。ここで死んでこそ、今まで生きてきた意味があるの。あなたのいない人生なんて、私にとってただ苦しいだけ。

私は意を決して、睡眠薬の袋を開けた。これで、あなたと一つに……。

」
でも結局、私は薬を飲むことが出来なかった。いざ死のうと思うと、私の中の何かが、私を強力に引き止めたから。

恐怖——それもある。でも、もつと別の何か、本能みたいな物に引き止められて、私は動くことすら出来なかった。

私はがっくりとひざをついた。涙がとめどもなく流れ出てくる。

「いいんだよ、由美子、これで。僕はいつも君のことを見守っている。君は生きて、そして幸せをつかむんだ。僕の方までね」

「信彦さん——」

「君にお別れの言葉を言えてよかったよ。何時までも、後ろ向きになつてないで、いい人を見つけるんだぞ」

段々と信彦さんの雰囲気が弱くなつていくのを感じる。

「待つて！ 行かないで」

「いいんだよ、由美子。約束だぞ。絶対幸せになれよ——」

信彦さんは——消えた。

その後どうやって歩いたのか、私は憶えていない。ただ、気付いたときには、私は山を下りる国道に突き当たっていた。その道を、三〇分位下つて駅に着いた。もう夕方だった。

私はただ呆然としていた。信彦さんが私を安全に導いてくれたのだと気付いたのは、ずっと後になつてからの事だった。

夕暮れの車窓からみる景色は、また格別に美しかった。傾いた夕日に照らされて、植物がみな黄金きんのように輝いている。私は、想い出のこの高原の景色を、一生懸命目に焼き付けていた。

もう、ここに来ることはないだろう——私は、ようやく少し動くようになった頭で考えた。私はもつと前向きに生きなければいけない。信彦さんのアドバイスだから。

膝の上には、小さなラベンダーの鉢。駅の売店で売っていた。これを庭一杯に増やそうと思う。別に、信彦さんの身代わりじゃない

の。ただ、私にとって大切な花だから。

今思うと、私が死ねなかったのは、現世に引き止められたからだったような気がする。まだ逢わなくてはならない人、しなくてはならない事が、沢山あって、まだ早いと。

あるいは、いつかまた、私にも好きな人が出来るかもしれない。でも、そのときでも、私を見捨てないでね。あなたは一度死んだけど、私の心の中で生きている。私とあなたは二人で一人なの。何時までも、いつまでも。

信彦さん。

私を立ち直らせてくれてありがとう。

きつと、私、あなたが最後に言ったこと実現してみせる。何故って、それが、私に出来る唯一の事だから――

「由美子。約束だぞ。絶対幸せになれよ――」

END

一九八五年十二月 初稿

一九九五年十二月四日 改訂

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2777q/>

ラベンダー・ガーデン

2011年2月25日23時10分発行